ダンジョンに潜ろうと思います

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダンジョンに潜ろうと思います

【Nコード】
N0100BA

【作者名】
ボナンザ

【あらすじ】
とある宗教の要職を連ねる一族として生まれた主人公は、その生き方に疑問を持ち、日々己の命を燃やすダンジョン探索者に憧れることになる。恵まれたレールを逸脱する事になるが、主人公に後悔はない。しかし主人公はその生まれから、ダンジョン探索者の認可と同時にとある密命を受けることになるのだった。

０１話　グインは未だ探索者未満　ｖｏｌ．０１

気合の入れた一閃が肉を切る。
切り跡からは血が飛び散り、地面の上を首がころころと転がった。

「ふう、やっとクリアか……」

薄暗い洞窟の中に、一人の男の声がこだました。
男の名前はグイン。
将来をダンジョン探索で生きていこうと決心した、１５歳の少年である。
グインは黒い煙となって消えていくモンスターに目をやった。
今倒したこのモンスターは、このダンジョンに潜むボス。最下層の君臨者だ。
体長はグインの倍、体重はおおよそ数十倍もあっただろう。
しかしグインは、その鍛え抜いた剣技で、一人のこのボスを打ち倒したのだった。

「さて、クリア報酬をいただきましょうかね」

グインは血で汚れた剣をぱっと振って、鞘に収める。
グインは息一つついておらず、まだまだ余裕が見えていた。
決してこのボスが弱いわけではない。むしろこのダンジョンを一人でクリアしたグインが異常なのである。
ボスを倒したことにより奥の扉が勝手に開く。
グインは足を進めて入っていく。
そして奥あったのは、赤い宝箱だった。

「なんつーか、こういうのって一体誰が用意しているんだろうね」
グインはひとり言を呟いて、しゃがみ込み宝箱を開けてみる。
中にあったのは一振りの剣。
それを見たグインは顔をしかめる。

「また武器かよ……」

これで3連続武器である。
クリア報酬と言えば、そのダンジョンの中でも最高のものが手に入るとされているので、否応にもその期待は高くなる。
しかしもうすでにある程度の装備が揃っているグインにとっては、このような武器は必要なかった。
もちろん今の武器よりも良い物という可能性もあるが、今グインが使っている冥剣『ガクヒ』はこれ以上の難易度のダンジョンで手に入れた一品のため、その可能性は低いのだ。
それよりも特別な消耗品や便利なアイテムの方がグインにとっては嬉しいのである。
グインはしぶしぶと剣を拾い、背中に背負っていた袋に詰め込むことにした。
すると不思議なことに、その袋は体積を増すことなく剣が収められる。
この袋はレア効果の一つである『亜空間収集機能』を備えているため、どれほど荷物を積んでもかさばることがないのだった。
グインはクリア報酬の間の奥にある、脱出用の泉に身を浸し、ダンジョンを後にした。

宗教都市ブルバニア。

そこはグインが生まれ、育った、世界に名だたる大都市である。
宗教という言葉が冠に付いているように、この都市はヤズマ教という宗教の聖都が置かれており、そのため貿易に信者に神官にと、多くの人間が交易し莫大な富が築かれていた。
グインはその街の一角にある、小さな酒場に入っていく。
表の看板には木彫りの文字で『トサカ頭のニワトリ亭』と書かれていた。

「いっらしゃい、ってグインか……」

筋骨隆々としたモヒカン頭の店主が、グインを見るなり呟いた。
「おいおいマスター、そりゃないっしょ。これでもきちんとした客だぜ、俺？」
「客ねえ。まあ、笑顔を振りまいて欲しけりゃ、きちんとツケは払うこったな」
「うげっ、それを言われちゃ返す言葉がなくなっちまう」

グインは笑いながら、バーのカウンターに腰掛ける。
「あー、疲れた疲れた。ひとまずエールと豚の塩漬け一つずつお願いするわ」
「はいはい、どうせ今回もツケなんだろ？」
「わかる？」

いつもの軽いやりとり。
グインはこの空気が好きだった。
「今日もダンジョンの方に行ってきたのか？」

マスターが酒を注ぎながら聞いてくる。

「うん。もうあのダンジョンならソロでクリアも楽勝になっちまったよ」

「へえ。あそこはC級の中でもそれなりに難易度は高い方なんだがな。それをお前みたいなガキンチョがねえ。実力だけは一人前だ」

「まあね。自画自賛になっちゃうけど、自分でも実際結構なもんだと思うよ。俺ぐらいの年齢であのダンジョンをソロクリアできるのは、世界でもほんの一握りでしょ？」

「まあな、それは認めてやるさ。しかしそのくせ、金払いが悪い。そこさえどうにかなりゃ、俺としても愛想を振りまいてやってもいいんだがな」

「も〜、おっちゃんには悪いと思ってるよ。でも俺の年齢じゃあ、ギルドにはまだ登録できないんだからしょうがないじゃん。おかげで戦利品を捌けなくて、溜まりに溜まっちゃって困ってんだよ」

ギルドと一口に言っても様々であるが、たいていギルドと言えば『ダンジョンギルド』を指すのが常である。

ダンジョンギルドは世界に点在する数多のダンジョンを統括し、運営するギルドであるが、この世界においては一国に匹敵するほどの権力を持っていた。

そしてそのダンジョン内で手に入った武器は、売買をするならギルドを介在してでしか許されず、個人で販売することは固く禁じられている。

そのためグインは、手に入れたものは膨大なれど、金に変えることはできていなかった。

「あれか。まだ親父さんが許してくれないのか」

マスターは注いだばかりのぬるったるいエールを、グインの前に

置きながら聞いてみる。
グインはそれを、ぐいっと一気にあおる。
「そっ。親父のやつ頭が固くてさぁ、身内からダンジョン探索者のような下賎な者を出すわけにはいかん！　ってそればっか。まったくいつの時代だよって話さ。さっさと16になって、独り立ちしてえよ」
16歳未満がギルドに登録するには、保護者、もしくは後見人の許可が必要だ。
おかげでグインは今までずっと、モグリのダンジョン探索者として行動している。
「探索者が下賎ねえ。お前の親父さんって結構な身分なものなのか？」
「うっ……それは、内緒」
「ふ〜ん、まあいいがね」
余計な詮索はしないとばかりに、マスターは豚の切り身の乗っかった皿を出した。
豚の肝の塩漬けであるが、これに胡椒がたっぷりとかかっており、キツイ塩味がこれまた酒に合うのだ。
グインはぺろりと一切れ飲み込んだ。
「うっめ」
香ばしい匂いと、弾ける辛味が合わさって、口の中がひりひりする。
それを癒すように酒をぐびぐびと飲み、息を吐く。

「あ〜、最っ高。これ以上うまいもんなんて、ぜってーこの世に存在しないだろ」
「そう言ってもらえるとお世辞でもありがたいがね」
「いやいやマジだって。最高だよこのコンボは」
　そうしてグインは、もう一切れの豚の塩漬けに手を伸ばしながら呟いた。
「しかし、こうしてこれが食えるのも、あと一ヶ月。そう思うと、16になるのも良いことばかりじゃねえなあ」
　遠くを見つめ、寂しそうな瞳をしたグインを、マスターはグラスを拭きながら声をかける。
「確か来月が誕生日だっけか？」
「ん、そっ。16になるから、晴れて俺も一人前の探索者になれるんだけどね。でもそしたらこの町を出なきゃいけなくなる」
「ん？　そうなのか？　別にこの町を根城にしてもよかろうもんに」
「いやいや、駄目だよそんなの。やっぱ旅をし、世界中のダンジョンを制覇してこその探索者さ。家住なんて、三下のやることだよ」
　ダンジョンは世界各地に点在する。
　その中には様々なダンジョンを探索する流れの者もいれば、一つのダンジョンを縄張りにする定住者もいた。
　しかしその実後者の方は、基本的に実力が劣るとして下に見られることが多いのだ。
　若いグインにとって、それは到底認められることではない。
「ふん。そんなもんかねえ」

マスターは呆れるように呟いた。

「まあ実際は、俺はそういうのも有りかなあ、とは思うけどどね。安定を求めるのは人間の性だろうし。ただ若いうちは挑戦してみるべきだと思うわけよ、やっぱ」
「ほう、言うじゃないか」
「突っ走ってばっかじゃ、どっかで息切れするのは目に見えてる。そんぐらいはわかってるさ。だから俺は、体力の有り余ってる今、やりきりたいんだ」

満足そうに呟くグインを見て、マスターはにやりと笑った。

「とか何とか言って、実はこの町で暮らすと、親と顔を合わせることになるから嫌なんだろ？」

グインは渋い顔をする。

「う〜、まあ、それもあるけど……」
「ふん。親の期待を裏切っていたたまれないんだろうが、どこかで割りきらんにゃ、一生呵責となって追いすがるぞ。それが剣の鈍りにつながって、命を落とす事になるかもしれん。心にはっきりと白黒はつけておくようにな」

グインは舌打ちをした。

「何だよ、説教かよ」
「ああその通り。これは説教だ。そもそもお前みたいな年頃が、説教から逃げきることなんてありえないんだよ。まあ悪いことは言わないから、きちんと出発前にけじめはきちんとつけとけ。そのまま黙ってだと、きっと後悔することになる」

グインはテーブルに頬杖をつき、不貞腐れたように呟く。
「けじめねえ……」
するとマスターは、テーブルの下から、何やらノートを取り出した。
そしてペラペラとめくり、あるページのところに来ると、グインに見やすいように反転させて差し出す。
「これがお前の貯めたツケの総額な。これをきっちり払い終えるのも、けじめの一つ」
ページを見たグインは驚いた声を上げた。
「ええっ、12700オース!？　それってマジで!？」
12700オース。
それは一般家庭の一ヶ月の生活費に相当する金額だった。
「ああマジだ。でもこれでも結構おまけしてやってんだぜ？　かわいい弟分のものとしてな」
「うえ～、かわいい弟分っていうなら、全部タダにしてくれてもいいのに……」
「駄目だ。きっちりと責任は果たす。それは大人として当然の義務だからな。甘やかすわけにいかん」
グインはテーブルに突っ伏した。
「また説教かよお……わかったよ、払いますう」

グインは力なくそう答えた。
マスターは満足そうに頷いた。

０１話　グインは未だ探索者未満　ｖｏｌ．０２

『トサカ頭のニワトリ亭』を後にしたグインは、そのまま路地を抜け、人気のない通りまでやってきた。
そこでグインは、まるでこれからお菓子をつまみ食いする子どものように、何度も辺りを見回した。バレないように、そーっと、そーっと、頭を動かし確認する。
そして辺りに気配がないことを確信すると、さらに狭い路地へと入っていく。
そこは人一人がどうにか通れるほどの細さだった。普段通いなれた人が見ても、ここに道なんてあったかどうか覚えていないに違いない。
しかしそんな細い路地は、あまり見られたくない行動をするには、もってこいの場所とも言えた。
グインは道の中頃に来ると、足を止めた。
そしておもむろに袋の中に手を突っ込み、中から一着の服を取り出した。
その服は、青を基調とし、潔白を表す白の十字模様が正中を射抜くように描かれている。一瞥するだけで、高貴さ、清らかさ、健やかさをイメージさせるそのフォルム。それはヤズマ教の神官が平時に着す装束だ。
グインは鎧を脱ぎ、取り出した装束を丁寧に羽織っていく。
頭を出して、袖を通す。その度に印象がガラリと変わり、まるで別人になっていく。
グインは服を整え、髪を正す。そして残った鎧を隠すように袋に詰める。
いつの間にやら、一介の冒険者だったものは、どこに出しても恥ずかしくない高貴な若い神官へと変貌していた。

グインはその姿で路地から出ると、胸をただし、歩き出す。
町を闊歩するその姿は、凛々しく、人目を引いてやまなかった。
ヴァシュミルツ家の次男。教会の将来を担うもの。その異名に相応しい、堂々とした立ち振る舞いだ。
しかしただひとつ、背負われた大きな袋が清廉な格好とどにもちぐはぐで、それを見た町民は首を捻って不思議がった。

「ただいま」

グインはヤズマ教会の大手門を抜け、教内にある私有地へと入り、家の扉を開けるなり呟いた。
ひんやりとした大理石の玄関は、どうにも人を迎えるには冷たすぎる造りだ。
返事は当然のように返ってこない。
まあこんな小さな声では、誰も気づくはずがないのも当然だが。
グインはそのまま、自分の部屋へと直行する。
親父や兄貴は仕事でいないだろうが、妹やその他の住み込みの信徒と顔を合わすのが嫌だったのだ。
階段を登り、廊下のつきあたりにある端の一角。机とベッドと本棚と衣装掛け。それだけしかない簡素な室内の、唯一自分だけのテリトリー。
グインはそこに逃げこむと、袋をドアの重し代わりに立てかけて、そのままベッドに飛び込んだ。
体は弾力に跳ね返されてボフンとはずむ。やがてずぶずぶと沈んでいく。
ベッドの程よい柔らかさが心地よく、さらに食事をした直後ということもあり、少しばかり眠くなる。
しかしグインはそれを気合ではじくと、神官服を脱ぎ捨て、い

きなりベッドの上で筋トレを始める。
グインにとって筋トレは日課だった。
トレーニングを初めて以来、一日たりとも休んだことはない。
腹筋背筋腕立てと、定番のメニューを体が吊るまで繰り返し、逆立ちに素振りスクワットなどで体が悲鳴を上げるまで傷めつける。
今朝ダンジョンをクリアしたばかりであるが、１日の手抜きは衰退の元と、ひたすらに励んで繰り返すのだ。

そうして何時間もトレーニングを続け、体中が汗だくになったころ、階段を上がる足音がグインの耳に届いた。
次いでドアが開き、厳つい顔がそこから覗く。
太く吊り上がった眉に、大きな鷲鼻。そして顔を覆うあご髭。
グインの父親のヨアヒムだった。
重しがわりにしていた袋は、ほんの数秒の防波堤にしかならなかったようだ。

「休みの日にトレーニングか。精が出るな」
ヨアヒムはグインを見るなりそう言った。
しかしこのトレーニング、これは別に父親のためにやっているわけではない。
むしろグインの身勝手な目的、家を出て探索者になるためにやっているのである。
そういう背景があるため、グインには今のヨアヒムの言葉が嫌味に聞こえてしまう。
グインはトレーニングをピタリと止めた。
「父さん。俺、１６になったら家を出て、探索者になるから」
前にも何度か口に出したことはあったが、はっきりと宣言したの

は、これが初めてであった。
言ってやったとグインは思う。
しかしこれでいいのだ。いつかは言わなければならないことなのだから。
するとヨアヒムは眉を寄せた。

「前々から確かにそんなことを言っていたが……本気なのか？　お前には、教会騎士団長の道を用意しているのだぞ？」

教会騎士団長。
それは騎士団の花であった。
団長になるには実力はもちろんのこと、出生や信仰心、さらには有力な後ろ盾が必要になる。
そんな後ろ盾に、ヨアヒムは立とうというのであった。
グインの属するヴァシュミルツ家には、それだけの力があった。
基本的に派閥で固まる教会勢力の中において、ヴァシュミルツ家は、多くの血縁者を有するのだ。
それにはちょっとした理由がある。
聖職者は普通妻帯しない。それは欲を断ち、修練を経て、神に仕えるためだ。欲を耐えずして聖職とどうして名乗れようか。それは価値観として当然のこととされている。
しかし何事にも例外がある。
それがヴァシュミルツ家である。
ヴァシュミルツ家の役割は、卜占（ぼくせん）だ。
啓示を占い、それが吉か凶かを判断する。
しかしこの、神の啓示をルールに則って判断するこの職務は、天啓を具体化するという事に等しかった。
これは統治において役立つが、そもそも恐れ多いことなのだ。
神の意志を人の手で判断しようというのである。禁忌とされてもおかしくない。

為政者には正当性が求められた。誰でも行えるとものではなく、許された者だけが代弁できるとして、理由付けが必要となったのだ。
相伝では足りない。となれば血伝だ。
こうしてヴァシュミルツ家は、教会内において唯一、血を残すことが許された。
そんな卜（ぼく）祭外司教というその階位は、法王と3人の枢機卿に次ぐ位置とされる。
教会に影響力を持とうとして、外戚には歴代王族、有力貴族が名を連ねてもいる。
グインはそんな家に生まれたのだ。
けれどもグインにとって、そんなことはもうどうでもよい。
「悪いけど、俺は本気さ。もう決めたことだ。父さんの期待に答えられないのは申し訳なく思う。でも自分の考えを曲げるつもりはない」

家を継ぐのは兄がいる。
そして兄はそれに邁進している。
ならばもう役目は果たせているはずだ。
自分の夢を追いかけても問題はない。
グインはそう考えている。

「はあ。お前は……恵まれたレールを投げ出すというのか……」

ヨアヒムは重い息を吐く。

「確かに、恵まれていると思うさ。でも俺は探索者に憧れちまったんだ。人生が2度あるんなら父さんの言うことも聞くかもしれない。でも人生は、1度しかないんだ」
「しかしな、グイン。探索者とは厳しい職業だぞ？　平気でコロコ

ロと命を落とす。お前は甘く見てないか？」
「んなことねーよ。ってかもう現場も知ってるし。探索者になって成功できるのは一握りだし、痛く苦しい思いもしなきゃいけない。五体満足で引退できる確率なんて奇跡に等しいし、怪我の原因がそこらに転がってる。そんなことわかってる。でも、俺は夢見ちまったんだ。だからもう、どうしようもねーんだ」
グインの言葉にヨアヒムは言葉を詰まらせたようだ。
ヨアヒムは考え込んだように動かない。
「父さんには悪いとは思ってるよ、期待に答えられなくて。でも、俺は決めたんだ」
するとヨアヒムはゆっくりと口を開く。
「しょうがないか……。私としてはあまり望まないのだが……」
何か考えがあるような台詞だった。
ヨアヒムはグインに向き直る。
「グイン。明日の正午に法王猊下の執務室に顔を出しなさい」
「は？　法王様の？」
グインは耳を疑った。
何故ここで法王猊下の名前が出るのかわからない。
法王は教会においての最高権力。神に次いで絶対の存在だ。
可能性としては、出立を止めるように言われることだが、しかしこんな私的な問題に、猊下が口を出すとも思えない。
けれどももし法王猊下の命令となれば、私心など押し殺すしかなくなってしまう。

「何、心配するな。別にお前の旅立ちを止めようというわけではない。むしろ逆だ。法王猊下直々に、お声をかけてくださろうというのだ」

しかし法王猊下が直接である。

グインにはいまいち信じられない。

「いや、わけがわかんないんだけど？　そんなオオゴトなわけ、これ？」

「これ、その言葉遣いは不敬が過ぎるぞ。きちんと選ぶように。まあ明日来ればわかる。今言えるのはそれだけだ」

そう言うとヨアヒムは背を向ける。

「それと、このことは他言しないようにな」

そして一言付け加えると、そのまま去っていった。

グインはその背中に声をかけることもままならず、部屋にはぽつんと立ち尽くす。

まったくわけがわからなかった。

「318……319……」

ひとまず筋トレをしながら考えようと思い、スクワットを開始した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0100ba/

ダンジョンに潜ろうと思います

2012年1月2日09時46分発行